



「英語で教える英語の教師」を育てる

文学部 糸井 江美



文教大学で教えることになって15年近くなる。大学に勤める前は、さまざまな分野に首を突っ込み、さまざまな職を転々としてきたが、今ではそんな経験が授業を作っていく中で生かされていると感じている。最近は特に英語の歌や絵本を使った授業づくりに興味があり、大学の授業では、どんな教材をどのように使えば楽しく効果的な授業になるのかを学生と一緒に考えている。とにかく学生が主役！わたしは出来るだけ教壇に立たないようにしたい。(いとい えみ)

「将来は英語の教員になって、子供たちに英語の楽しさを教えたいんです」と目を輝かせて語ってくれる学生がいる。そんな彼女たち、彼らたちの夢実現のために、英語教授法や第二言語習得に関する理論を紹介しながら実践的に学べる授業（英語演習）を展開している。学生が実際に英語を使って教えてみる（マイクロティーチング）機会を数多く持てるようにと授業で工夫している点や苦勞している点などをここでは紹介しようと思う。

英文科に入学してくる多くの学生は、将来教壇に立って子どもたちに英語でコミュニケーションする魅力を伝えたいと思っている。その夢を実現するには、英語教育に関する理論を学び、学んだ理論を実践の場に生かせるようになることが求められる。さらに学生には英語の授業は英語で行い、生きた英語を子どもたちに教える英語の運用能力が求められている。そこで、私が担当する英語演習の授業では、「幼児・児童を対象に歌・チャンツ・絵本などを使って英語を教える」ことをテーマに、学生たちが英語を英語で教える機会を出来るだけ多く持てるようにしている。もちろん「教える」といっても教室内に幼児・児童がいるわけではないので、学生たちが先生役と生徒役に分かれて実践を繰り返すことになる。それでは、簡単に授業の進め方を説明する。

今年度の登録者の数は34名なので演習の授業には適したクラスサイズだと言える。ま

ず **Teaching Tips** や教室英語などが英語で書かれたプリントを配り英語で簡単に説明をする。教室英語に関しては実際に学生たちは声を出して個人やペアで練習を繰り返し、後のマイクロティーチングで習った表現が使えるように準備する。教室英語には、例えば“**Good morning! Who's absent today?**”のような社交目的の表現（これは簡単そうで案外難しい）、“**Please look at the board**”のような授業運営に関する表現、そして“**Why do you think the main character in this essay did such a thing?**”のように授業の内容に関する英語表現がある。この3種類の中では決まり文句でほとんど成り立っている授業運営に関する表現が最も覚えやすく、授業でも一番練習に力を入れている。

授業運営に関する英語表現についてももう少し説明を加えたいと思う。例えば、写真で学生がやっているアクティビティーは**TPR (Total Physical Response)** と呼ばれるもの

で、特に小さな子どもを対象にしたリスニングの力をつけるアクティビティーである。教師は簡単な命令文を英語で言うが、その時には教師の動作や表情も子どもの英語理解を助ける大切な要素になっている。



「授業風景」

“Please stand up!” , “Get into a line.” , “Can you make a big circle? A nice round circle here.” というような簡単な指示から始め、次に子どもに英語で指示をして絵を描かせたり何かを作らせたりするアクティビティーに発展させていく。例えば、 “OK, everyone, we're going to do some coloring today. Look here, I have a picture for you to color. Now take out your color pencils.” このような英語表現が文字として書かれているととても簡単に思える。難しい単語はひとつも無く、それぞれの文章も短いものばかりだが、話すとなるとなかなか口からスムーズに出てこない。英語を話し慣れていないので当然かもしれない。そこで少しでも英語を話す力が伸びるように授業ではいつも4、5人のグループを作り、全員が一度は先生役をやることになっている。グループでの練習が終わると数名が今度は教室の前に立って、全員を対象に先生役になる。学期の初めには恥ずかしくてなかなか声が出なかったり、つついプリントばかりを見てしまった学生も何度も練習を重ねる内に声が出るようになり、スムーズに英語が口から出てくるようになる。この原稿を書いているのは6月の下旬、ちょうど春学期が後半にさしかかったところで、かなりの変化を私は感じるようになってきた。

春学期の最後にはグループごとの絵本を使ったアクティビティーの発表がある。絵本を使った活動には一番力を入れており、時間数も多く割いている。絵本は子どもに英語を教える教材として優れているだけでなく、学生を含めた成人も楽しみながら英語を学べる教材だ。

大学の図書館にはかなりの数の英語絵本が揃っており、まず学生は最初の一冊を借りてきてその絵本の教材としての評価をグループ内で行う。次にグループの中で一番評判のよかった絵本をクラス全体に発表する。私も自分が気に入っている “Winnie the Witch” をOHCを使って紹介した。この絵本では子どもたちに色に関する英語を教えることができる。また、次に何が起こるのかを推測させたり、友情について考えさせたりすることができる。

翌週から学生たちはグループごとに発表で使う絵本の選書に入る。それと同時に絵本を使ったどんなアクティビティーを行うのかというレッスンプランを考え始める。しかし、今まで絵本を使った英語教育を受けてきていない学生には、なかなかアイデアが浮かばないようだ。そこで、“Using Caldecotts Across the Curriculum” に載っている具体的なアクティビティーを紹介することにした。残念ながらこの原稿を書いている6月末の時点では、これ以上のことをお伝えすることができない。学生たちは7月末にグループごとに絵本を使ったアクティビティーを発表することになっているので、興味のある方はどんな発表があったのかを問い合わせてもらいたい。

大学の演習を担当していて残念に思うことは、実際の小学校や中学校の教室のように簡単に机や椅子を動かして、グループになったり、身体を動かすスペースを作ったりすることができないことだ。固定された長い机のままなんとか身体をひねり不自然な恰好しながらのグループ活動になる。身体を動かすアクティビティーも狭い通路で、なんとなく身体を動かしたつもりで終わってしまっている。机や椅子が簡単に移動でき広い空間を作ることができる教室環境が整っていればより多様で活動的な模擬授業が展開できると思う。

英語演習IIIは3年生の春学期に設定されており、将来さまざまな形で子どもたちに英語を教えたいと考えている学生が履修している。しかし、残念ながら自分が身に付けたい英語力や教師力の目標設定ができておらず、教壇に立って子どもたちに英語を教えているクリアな自己イメージを持っていない気がする。今後は学生が将来の教師としての理想像を強く思い描けることができるような授業作りに挑戦したい。